海外養殖魚研究会報　第４６号

発　行：海外養殖魚研究会　平成３年３月５日

事務局：〒102　東京都千代田区麹町４－５　第７麹町ビル５５５号
㈱国際水産技術開発内　TEL:03-3234-8847
FAX:03-3239-8695

第４６回海外養殖魚研究会が、平成３年３月１日（金）午後５時半～７時半に、ＪＩＣＡ国際協力総合研修所３階３０１号室で行われました。今回は、①　元ＳＥＡＦＤＥＣ養殖専門家の永井顕充氏に「チャイロマルハタの自然産卵と種苗生産について」、②　㈱国際水産技術開発の平松一人氏に「モーリシャスのエビ養殖について」の講演をお願いしました。

研究会終了後には、恒例の親睦会が「メルツェン」で開かれ、１５名が歓談しました。

研究会参加者は、下記の通りです。

木谷浩（ＪＩＣＡ国際協力総合研究所水産専門員）、戸塚俊二、斎藤悦夫（ＪＩＣＡ水産協力室）、大黒清隆（日本サイロ株式会社）、松永善伸（三井農林海洋産業）森岡伸介（東京水産大学大学院）、石井優一（Ｄ＆Ａエンジニアリング）、池田成巳（緑書房）、大島陽（東京冷熱産業）、並里次雄（建設企画コンサルタント）、林秀二（LUXUR REALTY CORPORATION,PHILIPPINES)、小林茂夫、宮村光武、永井顕充（フリー）加福竹一郎、河原省吾、森本直樹、赤津澄人、池ノ上宏、赤井正夫、川口正徳、平松一人、曽根重昭（国際水産技術開発）

## ①　チャイロマルハタの自然産卵と種苗生産について　永井顕充

演者は１９８８年から２年間フィリピン共和国イロイロ市のＳＥＡＦＤＥＣ　ＡＱＤ（東南アジア漁業開発センター養殖部局）にてハタ類の養殖開発研究を行ってきた。この間の試験内容及び結果について述べる。

１９９０年７月より約４ヵ月間５０トン水槽にて飼育してきたチャイロマルハタの３．５～５KGの親魚より月平均１０００万粒の受精卵が採集された。この受精卵を使用し孵化後１ヵ月間の生残率の向上を図るために種々の試験を行った。

1－　ワムシ、カキ幼生等による初期餌料試験
2－　照度差による生残率試験
3－　放養密度差による生残率試験
4－　人工餌料と活き餌の比較試験
5－　換水頻度の及ぼす影響及びアルテミア給餌時期の差による生残率比較試験
6－　ハッパネットによる実験

以上の諸試験を実施した結果、設備等の制約もあり大量種苗生産の確立には至らなかったが、養殖部局は種苗生産における基礎知識を修得することができ自主開発を目指す方針で試験を継続する予定である。なお、種苗サイズ（2.5㌘、 0.3㌘）になるには約５０日程度が必要と思われる。

② モーリシャスのエビ養殖について　　平松一人　㈱国際水産技術開発

演者は１９８８年１月より３年間モーリシャス国のアルビオン水産研究所にてエビ養殖の開発可能性調査及び養殖試験を実施してきた。この間に感じたモーリシャス国の水産の現状及びエビ養殖の可能性について述べる。

モーリシャス国において観光産業は国家収入の大きな柱になっており、観光客向けに相当量のエビ需要があり、民間でのテナガエビの養殖や年間５００トン前後の輸入を行っている。この様な状況から当水産研究所では海産エビ（主にウシエビ、ヨシエビ）の親エビ養成、種苗生産、養成試験を実施した。現在試験段階ではあるがそれぞれの生産試験に成功しており、次の段階として商業ベースによる生産の可能性について調査を実施している。現地では日本企業と合弁でマグロ缶詰工場が操業しており、缶詰工場から出るフィシュミールが比較的廉価で手に入る。又、調査段階ではあるが約３００ヘクタール前後の養殖適地があり、現地における小中規模のエビ養殖の可能性は有望と思われる。

＜事務連絡＞

１）次回の研究会は５～６月頃開催する予定です。